

秋田県・甘肅省文化交流事業の報告

石井 志徳*

1. はじめに

秋田県・甘肅省文化交流事業は、幅広い視野を持った国際性豊かな人材の育成と多彩な文化の紹介や人々との交流を目的に、平成13年度から10年間の計画で開始された。平成15～17年度の3年間にわたって行われた秋田県埋蔵文化財センター・甘肅省文物考古研究所・甘肅省博物館による甘肅省武威市「磨嘴子遺跡」の合同発掘調査が終わり、交流事業6年目となる平成18年度からは「多様な交流」を行い、秋田県民・甘肅省民に「みえる、つたえる」文化交流づくりを目指すこととなった。そのため、過去5年間、秋田県埋蔵文化財センターから2名ずつ派遣されていた交流員を、秋田県埋蔵文化財センターと秋田県立博物館から1名ずつ派遣することとなった。筆者を含む2名が派遣された平成18年度の派遣期間は、5月17日～12月30日までの228日間である。

秋田県側から派遣された交流員の研修は、甘肅省博物館と甘肅省文物考古研究所を受け入れ先として行われている。また、受け入れの主体は、甘肅省博物館と甘肅省文物考古研究所が隔年で担当しており、平成18年度は、甘肅省博物館が受け入れの主体であったため、我々交流員は甘肅省博物館を拠点として研修を行った。それと併せて、甘肅省文物考古研究所では、甘肅省張掖市山丹県内にある万里の長城の調査とそれに関連する敦煌までの視察研修と甘肅省隴南市礼県の大堡子山遺跡の発掘調査の研修が行われた。

以下に、リニューアルされた甘肅省博物館を紹介するとともに、甘肅省博物館と甘肅省文物考古研究所で行われた研修について報告する。なお、文中の用語などのうち、中国語のままがふさわしいと思われるものは、そのまま中国語を使用している。

2. 甘肅省博物館での研修

(1) 甘肅省博物館の紹介

甘肅省博物館は、甘肅省の省都蘭州市（秋田市の友好姉妹都市）にある。甘肅省の文化財行政の一つの核としての役割を担っており、甘肅省内はもとより、中国国内外に向けて開かれた総合的な博物館である。その前身である「甘肅省科学教育館」は1939年に設立され、1956年に「甘肅省博物館」と改称、1958年に現在の所在地である蘭州市七里河区に移転された。2002年より拡張工事が開始され、2006年12月26日にリニューアルオープンした。



甘肅省博物館外観

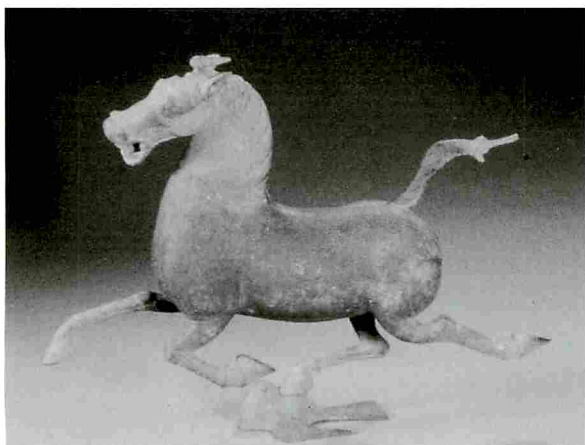
甘肅省博物館には、歴史部・自然部・文物保護修復センター・社会教育部・情報資料センター・陳列展示部・研究部・工程設備部・安全防衛部・人事教育処・弁公室・産業経営処の12部門があり、職員数は143人、そのうち日本の学芸職員に当たる専門職員は3分の2を占めている。また、専門職員の内、高級研究員が26人、中級研究員が51人となっている。

甘肅省博物館所蔵の資料は83,079件で、その内訳は、歴史資料が58,999件、民族資料が935件、近現代資料が5,257件、自然標本が17,888件となっている。また、そのうち国家一級文物（日本の重要文化財に相当）は680件で、そのうちの16件が国宝である。国家二級文物は2,600件、国家三級文物47,830件、一般資料31,546件、その他の資料386件

* 秋田県立博物館

である。

甘肅省博物館の特徴的な収蔵資料は、彩陶・簡牘文書・仏教芸術品および地方誌であり、特に武威雷台漢墓出土の銅奔馬（国宝）と武威磨嘴子漢墓出土の儀礼簡（国宝）、旱灘坡の医薬簡、涇川唐代大雲寺舍利金棺、敦煌藏経洞北宋淳化二年「報父母恩重経变」絹画（国宝）などは、国内外でも有名な貴重な資料である。また、館蔵の古生物化石と自然標本のうち、黄河古象、馬門溪龍（マメンチサウルス）は世界的に有名である。館蔵の一級文物の件数は、国内の省級博物館の中でも多い方にあげられており、甘肅省博物館が中国の文化財行政に占める位置の高さ、重さがうかがえる。



国宝「銅奔馬」

また、甘肅省博物館の特徴の一つとして、文物保護修復センターの存在があげられる。この部門は1962年に創立され、中国の中でも最も早く作られた三大文物保護室の一つである。文化財の修復・保護の研究は国内トップレベルかつ、世界レベルの水準を持っており、館蔵資料の保護・修復はもとより、甘肅省内各地の石窟の壁画や文化財の保護・修復も行っている。

甘肅省博物館は開館以来、大小合わせて300回あまりの展覧会（海外への出展を含む）を行っており、これまでの来館者数は、国内からの来館者が1,250万人余り、国外からの来館者が200万人余りとなっている。海外への出展は、日本・クロアチア・アメリカ・カナダなどの国々で20回余り行われている。

その他、北京大学・吉林大学・復旦大学・西北

師範大学・南開大学・西北民族大学・蘭州大学などの高等教育機関と連携して、通信教育や博物館の研究員が大学で講義を行うことなどを通して、人材の育成に貢献している。

（2）甘肅省博物館のリニューアル事業

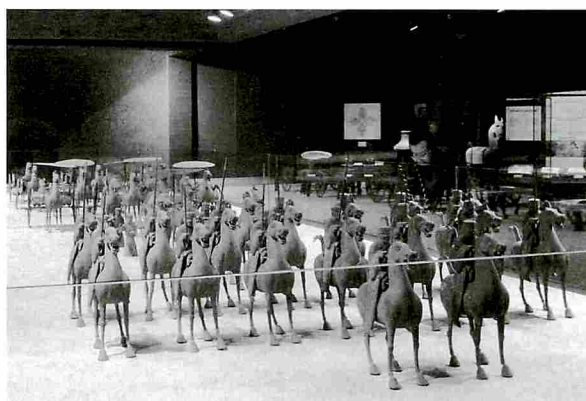


リニューアル記念式典

新しい博物館は、1億3,121万元（約19億6,800万円）を投じて、「重厚・優美・美観・人間性」という4つの原則のもとに設計・施工された。

新館の展示室の総面積は13,731.5㎡、大小19の展示室がある。その他に接待室4室、TV・PC・プロジェクターなどを備えた講堂1室がある。

常設展示は、甘肅省の歴史・自然・文化財の特徴と館蔵資料の特徴に基づいて構成されており、「甘肅シルクロード文明展」、「甘肅彩陶展」、「甘肅古生物化石展」の3展示室がそれにあたる。



「甘肅シルクロード文明展」（銅車馬儀仗隊）

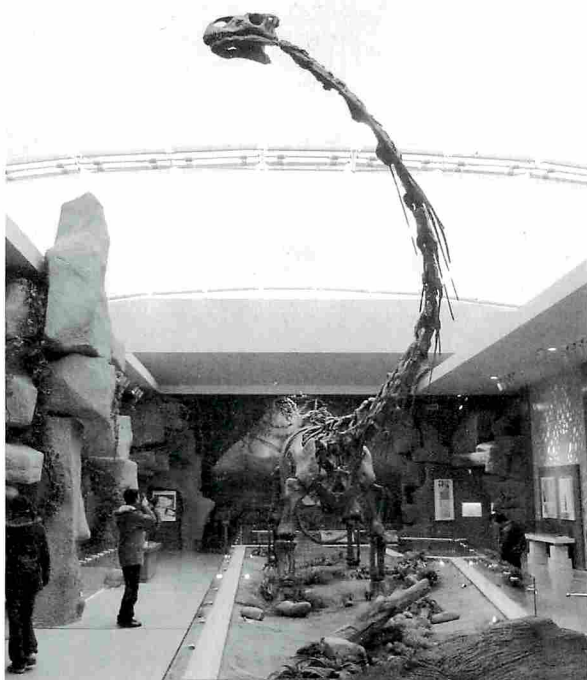
「甘肅シルクロード文明展」は、中国・インド・ギリシア・エジプト・バビロンなどの世界の古代文明国との関連を「シルクロード」を中心として展示しており、東西の政治・経済・軍事・文化・科学などさまざまな領域における交流を再現

している。2,000㎡の展示室には、甘肅省から出土した400件余りの逸品を展示しているが、ここ数年の発掘調査によつての新たに発見されたものも展示している。展示資料は、国宝「銅奔馬」をはじめとして、陶器・青銅器・金銀器・玉器・木器・磁器・絹織物などであるが、今回初めて展示される資料もある。



「甘肅彩陶展」

「甘肅彩陶展」は、彩陶の故郷といわれる甘肅省の特色を示す精巧で美しい彩陶を1,100㎡の展示室内に、400件余り展示しており、甘肅省の彩陶の発展史を表現している。今から約8,000年前の大地湾文化の彩陶にはじまり、仰韶文化・馬家窯文化・齐家文化・辛店文化・沙井文化へと時代順に展示されている。



「甘肅古生物化石展」(マメンチサウルス)

「甘肅古生物化石展」は、地球の生命の進化の歴史を柱とし、甘肅省内から発見された大量の古生物の化石標本を展示している。地球展示室、海洋動物展示室、恐竜展示室、黄河古象展示室の4つの展示室から構成されている。

これらの新しい展示室は、資料保護のために完全密閉式・人工採光・中央空調管理システムを採用している。



タッチパネル内のパズルゲーム

また、来館者が興味をもちながら見学できるようにというねらいのもと、先進技術を利用した音・光・映像などの展示効果によって、展示資料の文化財としての特徴とその芸術性を、来館者がより感じ取りやすいように、設計・構成されている。その一つの例として、タッチパネルと体験コーナーの設置があげられる。



恐竜と撮影しよう

タッチパネルは館内・展示室内の各所に設置されており、展示されている資料を写真と文字情報の他に、様々な映像・音楽と合わせて鑑賞するこ

とが出来ようになっている。他にも、子供向けのゲームが入っているタッチパネルや館内の案内図などの情報を得られるタッチパネルもある。

さらに、子供たちが参加・体験できるように体験コーナーも設置されており、「甘肅彩陶展」には、実際に陶器の制作を体験できるコーナーや彩陶のパズルなどがおかれているコーナーがある。「甘肅古生物化石展」には、「恐竜と競走しよう」・「恐竜と体重を比べよう」・「恐竜と撮影しよう」などの体験コーナーがある。

このように、リニューアルされた甘肅省博物館の展示室は、専門的な学術研究を公開する場としての機能と、来館者に対して「楽しみながら学ぶ」場を提供するという目的を達成するための様々な工夫が施されている。

(3) 甘肅省博物館での研修

次に甘肅省博物館で行った研修を紹介する。



収蔵資料の整理作業の研修

我々交流員は甘肅省博物館の歴史部を中心に、研修を行った。歴史部では、収蔵資料の整理作業や青銅器・彩陶の取り扱い、複製の製作（拓本をもとに製作）、新展示室への資料の搬入作業などの研修を行った。

収蔵資料の整理は、資料カード・受け入れ台帳を用いる点は同じであるが、歴史部の資料は、灰陶・造像・石刻・書画・写経・雑項（竹・木・角・牙製品など）の6項目に分類されており、その分類ごとに収蔵庫がある。そして分類ごとに2～3名の担当職員が資料を管理している。このような体制で資料の管理をしていること、収蔵庫内の整理が行き届いていることなど、参考になる点

が多かった。また、収蔵庫一つ一つに庫内の収蔵資料の台帳があった。この研修は博物館実習に来ていた蘭州大学の博物館学専攻の学生とともにやったのだが、12名いる実習生を2班に分け、各班の実習生6名に対して学芸員3名がついて丁寧な指導が行われていた。左の写真は、平成14年度の交流員の王勇副主任による指導の下、受け入れ台帳および資料カードの作成と資料への注記の記入の研修の様子である。私も彩陶の資料1点に注記をさせていただいた。



青銅器の検品と取り扱いについての研修

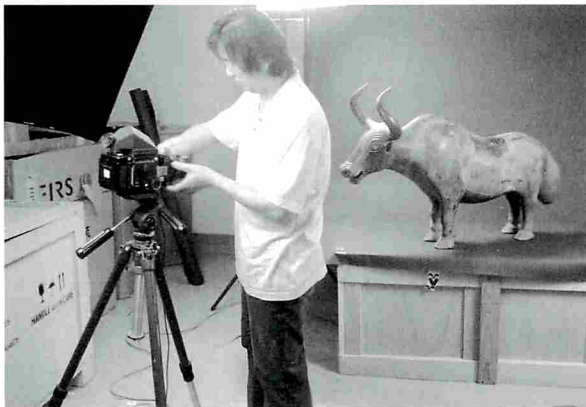
青銅器の取り扱いについての研修は、イタリアの博物館に貸し出し、返却された武威雷台漢墓出土の銅車馬儀仗隊の検品作業とともに行われた。十数箱に及ぶ青銅製の馬・馬車・人・武器類や牛・牛車などの検品作業を行ったのは、平成16年度交流員の劉志華さんで、資料の取り扱い上大事なポイントを分かりやすく丁寧に説明している姿が印象的であった。



彩陶片の洗浄と分類の研修

彩陶に関する研修は、博物館で購入した彩陶片などの洗浄と分類・接合作業を歴史部の賈建威主任・王勇副主任の指導の下、蘭州大学の実習生とともにいった。これらの彩陶片は、新しい彩陶の展示室で、新石器時代の場景を復原したジオラマなどの展示に利用されていた。

資料写真の撮影についての研修は、甘肅省博物



資料写真の撮影

館内の部門の一つである情報資料センターの趙広田主任が撮影している現場を見学させてもらった。趙主任は、甘肅省の文化財関係のさまざまな図録の写真を撮影している方である。こちらの撮影機材や撮影方法は日本と同じであったが、博物館内に資料写真・映像の撮影を専門に行う部門が置かれ、専属のスタッフが揃っていることが羨ましく感じられた。



石棺の複製製作

その他、週に一度行われる収蔵庫点検や館蔵資料の石棺の拓本取りとその拓本を利用した複製の製作、新展示室への資料の搬入と資料の配置なども見学もした。

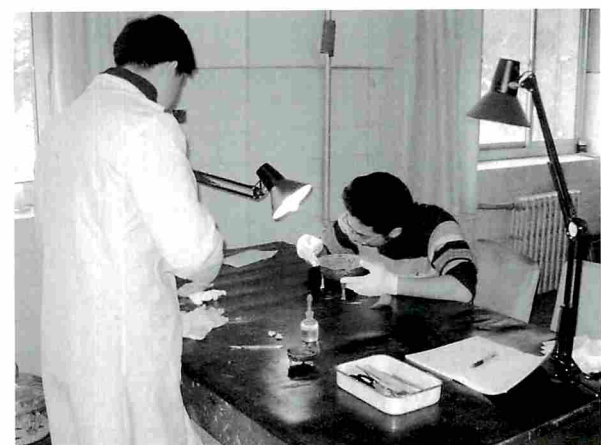
甘肅省博物館の収蔵庫は、収蔵庫のある建物の入り口の鍵を管理する職員が3人、歴史部の各収蔵庫の鍵を管理する職員（収蔵資料の担当と同じ）が各2名ずつおり、非常に厳重に管理されている。また、全ての収蔵庫に警報装置がつけられており、さらに比較的重要な資料を保管する収蔵庫は、かつて銀行で使用されていた厚く頑丈な扉を使用している。



拓本取りの様子



新展示室への資料の搬入作業



青銅器の錆の除去

文物保護修復センターで、資料の保護・修復について1週間の研修を行った。文物保護修復センターの張健全主任は平成7年に秋田県に1年間研修・交流に来た経験があり、今年度秋田県に派遣された盧燕玲副主任が所属する部門である。保存処理をしている途中の絹製品・木器・漆器・陶器・青銅器・書を実見し、説明を受けたが、自前で資料の保護・修復を行っていることは、普段、専門の業者に委託している日本の多くの博物館との大きな違いであり、さらに職員各自が保護・修復の技術や方法を研究しながら、業務に当たっているということに驚くとともに大きな感銘を受けた。簡単な設備しかないという張主任の話であったが、中国トップレベルの保護・修復の現場を目の当たりに出来たことは非常に有意義であった。さらに、青銅器の錆の除去作業を実際にさせてもらうという、日本ではなかなか得がたい体験もできた。



日本語教室

毎年、秋田県からの交流員は、派遣先で日本語教室をおこなっているのだが、今年も甘肅省博物館の職員を対象に、比較的時間に余裕のあった5月と6月の平日の16:30~17:30に日本語教室を行った。

日本語を中国の方に教えるのだが、その際に中国語を使う機会が増え、さらに中国語の正しい発音を教えてもらえたり、日中文化の違いなどを話したりすることが出来るなど絶好の交流の場であった。参加者は、日によって多少増減もあったが、大変期待して参加していることが分かり、準備などが大変であったが、非常にやりがいのある交流・研修の機会であった。

3. 甘肅省文物考古所での研修

(1) 長城の調査

7月25日から8月6日までの13日間、蘭州市の西約400kmにある山丹県で行われた「万里の長城」の調査へ同行し、8月7日から8月13日までの1週間、張掖市・嘉峪関市・安西県・敦煌市・臨洮県での長城関連施設の視察研修を行った。



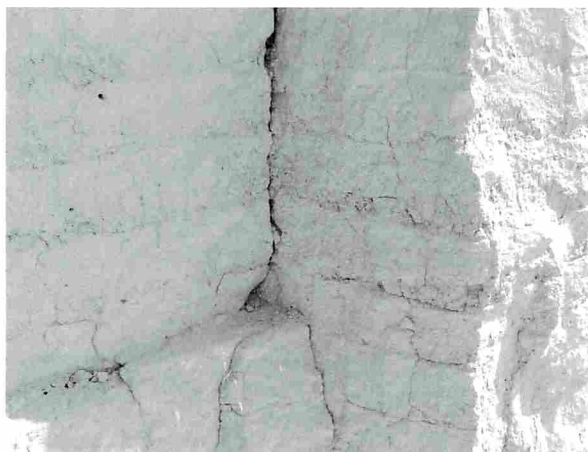
山丹県の明代の長城の城壁と烽火台

山丹県はシルクロード沿いの町であるが、蘭州市からこの山丹県を經由して敦煌へ到る一帯は、黄河の西側の廊下という意味の「河西回廊」と呼ばれている。河西回廊は、チベット高原の北辺につらなる祁連山脈の北麓地帯にあり、祁連山脈の連峰からの雪解け水が砂漠へ向かう河となって随所にオアシスを形成しており、現在の蘭州市を出発点として、武威市・永昌県・山丹県・張掖市・高台県・酒泉市・嘉峪関市を經由して、やや西方の安西県や敦煌市へと続く経路を指す。

甘肅省内には秦（紀元前221年～紀元前207年）、漢（紀元前206年～8年）、明（1368年～1644年）など各時代の長城や烽火台が見られ、その総延長は4,000kmに達すると言われている。この調査は、世界遺産である「万里の長城」を保護するため、現在の遺存状況を把握することを主たる目的として行われたものである。さらに、山西省・陝西省・内蒙古自治区・寧夏回族自治区・新疆ウイグル自治区の考古所や博物館職員の研修も兼ねて行われた。

山丹県には全長100km余に及ぶ長城が現存しているが、今回の調査対象は明代の長城本体の壁の他に壕、烽火台、その他の付属施設である。調査

は、長城に沿って歩いて観察し、その現状を計測して記録し、さらに写真撮影とビデオ撮影を行い、GPSを使用しての位置の測定、烽火台の図面の作成などを行うものであった。



烽火台
夯层

山丹県の明代の長城は、よく知られている北京郊外にある八達嶺城などに見られるレンガ造りではなく、黄土を突き固めて作られている。この突き固めた土の層を中国では「夯层」と呼んでいた。

調査した範囲で遺存している長城城壁の規模は底辺付近の幅が約3m、高さが約4mであった。



明代の烽火台

また、烽火台は、日干し煉瓦で造られているものもあり、規模は様々だが、断面は台形で、遺存状況の良好なもので底辺付近の幅7～8m、高さは9mほどであった。

調査範囲の長城は、風化による崩壊の他、鉄道や道路、電線などを通すために分断されている箇所も多く、さらに長城の城壁本体を工場や家の塀

代わりに利用する部分があるなどの人為的な破壊も見られた。文化財を保護することの難しさ、文化財とその周辺で生活する人との共存の難しさを感じるとともに、人類の文化遺産である万里の長城のすばらしい歴史景観を守るためにも早急に保護対策を講じる必要があることを実感した。

山丹県での長城調査の後、甘肅省文物考古研究所のマイクロバスで河西回廊を西へ向かい、敦煌へと続く漢代・明代の長城に関連する施設を見学した。見学した箇所は、体長34.5mの涅槃大仏が有名な「大佛寺（張掖市博物館）」（張掖市）、明代長城の西の起点である「嘉峪関」とこれに隣接する「嘉峪関長城博物館」（嘉峪関市）、「安西博物館」（安西県）、「敦煌市博物館」・「玉門関」・「玉門関文物陳列室」・「漢代長城並びに烽火台」・「河倉城」・「陽関」・世界文化遺産である「莫高窟」と敷地内にある「藏経洞陳列室」・「鳴沙山」（いずれも敦煌市）の4都市13箇所で、これらを4日間で見学した。その後、敦煌から河西回廊を東へ向かい、蘭州市までの約1,200kmの距離をマイクロバスで2日間かけて移動し、蘭州市に戻った。翌日は、蘭州市の南にある臨洮県の「秦代の長城（残存する3地点）」と「臨洮県博物館」を見学し、合計移動距離約2,200kmの1週間の研修を終えた。

これらの見学箇所で見た各種の文化財は、甘肅省内はもちろん、中国史上重要な学術的・美術的価値を持つものばかりであり、まさに一級品を見学することが出来た。

その上、この20日間の研修で一緒に調査に参加した方と交流を深められたことはもちろんであるが、今回の調査には、日本語で会話できる方が一人もおらず、コミュニケーションの手段として必然的に中国語を使わなければならなかったため、我々交流員の中国語が少し上達するという副産物もあった。それと中国の食生活をはじめとする日常生活を知ることが出来、その後の我々の研修生活に大いに役立つものを得ることが出来た。

（2）大堡子山遺跡の発掘調査

9月1日から11月3日までの64日間、蘭州市の南東約440kmにある隴南市礼県の大堡子山遺跡の発掘調査現場に同行して視察研修を行った。



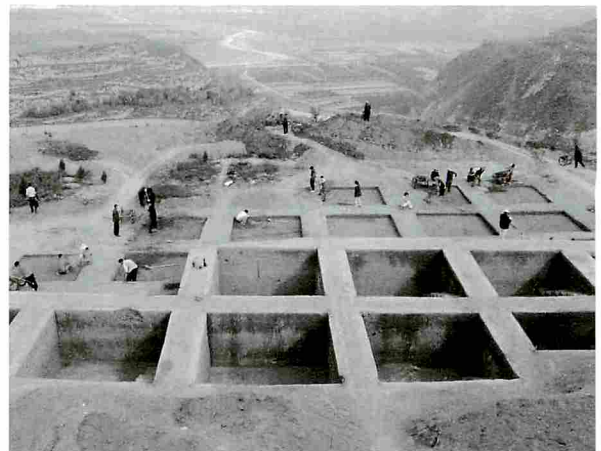
大堡子山遠景

大堡子山遺跡は、1990年代半ばに盗掘され、市場に流出した出土品の一つに「秦公」の銘文のある青銅の鼎があったことが知られてから、研究者の注目を集め、1990年代の終わりから発掘調査が続けられている遺跡である。

その結果、礼県の大堡子山周辺は、初めて中国を統一した秦の始皇帝（在位：紀元前221～210年）の祖先が活動していた「早期秦人活動地域」の1つとして近年注目を集めている。

今回の発掘調査は、北京大学考古文博学院・中国国家博物館（北京市）・甘肅省文物考古研究所の3機関によって行われ、調査の対象は、遺跡の中心である大堡子山の中下腹部にある西周から春秋時代（約3100年～2400年前）にかけての時期の「21号建築基壇」と命名されている建築遺構と、その周辺にある同じ時代のものと推定される数基の墓である。なお、この発掘調査は北京大学考古文博学院の3年生と同大学院修士課程の2年生の発掘実習を兼ねて行われており、我々交流員は、北京大学の学生とともに北京大学の趙化成教授をはじめとする北京大学の先生方と甘肅省文物考古研究所の王輝副所長をはじめとする職員の方々の指導の下、この発掘調査の視察研修に参加した。

大堡子山にはボーリング調査の結果、26の建築遺構が発見されており、今回調査した「21号建築基壇」は大堡子山の南東斜面に位置している。今回の調査の結果大堡子山からは長辺約115m、短辺約20mの南北に細長い方形の大型建物跡が見つかり、建物の内側からは、黄土を突き固めて作った厚さ約2mの建物跡の壁と、壁に平行して5m間隔で並ぶ径70cmほどの大きな礎石も検出された。

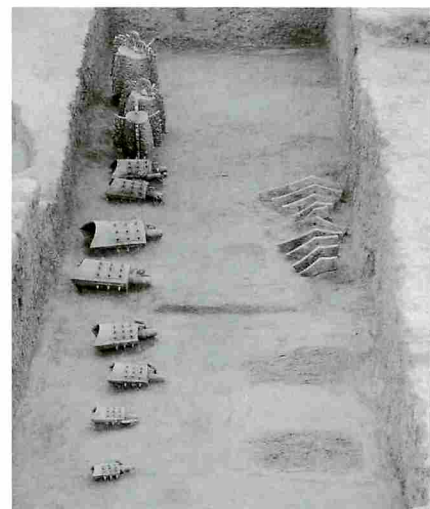


発掘調査の様子（調査範囲の東から撮影）



出土した人骨（頭部は南東向き）

また、墓からは編鐘と呼ばれる、大きなもので50cmほどの青銅の鐘8点などが出土した。



編鐘と石磬

これらの発見は、中国の考古学会でも重要な発見の一つとして注目されており、このような重要な発掘調査現場で視察研修ができたことは、大きな喜びである。

それとともに、この発掘調査現場での毎日が、良い研修の場であったことはもちろんだが、一緒に発掘調査をした北京大学の学生や、ご指導いただいた北京大学の先生、甘肅省文物考古研究所の職員、地元の作業員の方と交流できるこの上ない絶好の機会でもあった。

さらに、中国の方と寝食をともにし、中国人の生活の一端を垣間見ることのできる絶好の機会でもあり、非常に実りの多い交流・研修が出来た。

また、発掘調査の休日を利用して、平成15年度の交流員であった周広済さんが発掘している「馬家塬遺跡」（張家川回族自治州）や、中華民族の始祖とされる伏羲を祭った「伏羲廟」（天水市）、「麦積山石窟」（天水市）への視察研修も行われた。

4. 蘭州市内の博物館

蘭州市内には、甘肅省博物館以外にもいくつかの博物館があり、そのうち「甘肅省钱币（貨幣）博物館」・「蘭州市博物館」・「蘭州市地震博物館」の3ヶ所を見学した。



甘肅省钱币（貨幣）博物館

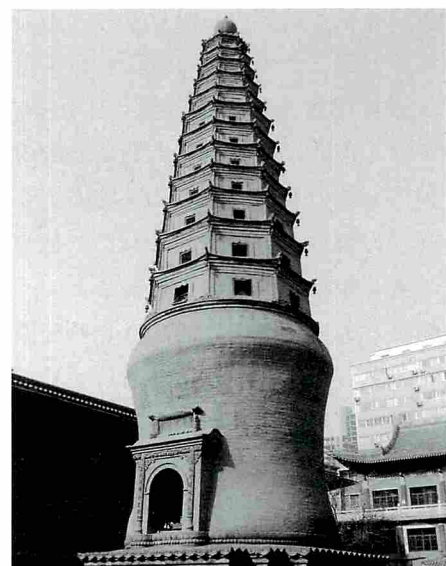
2003年に開館した「甘肅省钱币（貨幣）博物館」は、甘肅省に関わる貨幣の収集・整理・保護・研究を行っている博物館である。甘肅省はシルクロード上に位置するという歴史的・地理的条件を持ち、そのため多くの珍しい貴重な貨幣がある。そうした歴代の貨幣、約5000枚を展示している博物館である。蘭州市の東崗西路にある招商銀行の2階にある。

「蘭州市博物館」は、1984年の開館で蘭州市慶陽路の旧白衣寺の敷地にある。常設展示室である



蘭州市博物館

「蘭州歴史文物陳列」には、蘭州のここ100年の様子を収めた古い写真約40枚と館蔵資料189件を展示している。また、中庭には甘肅省の省級文物保護単位（日本の県指定文化財にあたる）に指定されている「白衣寺塔」が建っている。この白衣寺塔は、元は「白衣寺」内の多子塔であったが、寺が壊された後はこの塔だけが残っている。白衣寺は白衣大士の像があったことにより名付けられ、建築年代は遅くとも明の嘉靖年代である。白衣寺塔は明代の崇禎4年（1631年）と清代の道光23年（1843年）の2度修築され、1985年と1987年に蘭州市によって2度の補修を受けている。高さは23.8mの実心八角覆鉢式の12層の塔で、各層の八面すべてに龕があり、龕内には塑像の仏像が全部で96尊納められている。明代にこの地方を治めた肅王により建立された。



白衣寺塔



蘭州市地震博物館

「蘭州市地震博物館」は蘭州市北西部の安寧区にあり、1988年に蘭州市地震局と蘭州交通大学が共同で創建した中国最初の地震専門の博物館である。展示室はかつての防空壕を利用しているため、トンネル状の展示室となっている。展示室内には、地震にまつわる民間伝承や科学知識の普及のための壁画、実物資料の展示館、世界初の地震測量装置である「地動儀」を発明した張衡に関する展示などがある。我々を案内してくれた雷麦莉さんは、秋田県と甘肅省の友好交流事業を知っており、とても丁寧に展示室内を案内してくれた。

5. 第1回中国文化遗产日

2006年6月10日（土）に、蘭州市の東方紅広場で、「第1回中国文化遗产日」を記念する行事が行われた。これは、中国の有形・無形すべての文化遗产の保護とその啓蒙のために始められた行事で、今後は今年と同様に、毎年6月の第二土曜日に行われるとのことであった。この行事は、甘肅省文化庁と甘肅省文物局が主催して行っており、蘭州市では、市内にある文化財関連施設のパネル展示や民俗芸能の公開、さらに文物鑑定委員による一般向けの無料鑑定会が行われた。他の地域でも同様の催しが行われているとのことで、この日は博物館などの文化財関連施設は無料公開されるとのことであった。参加者は非常に多く、様々な文化財に対する関心の高さを伺い知ることができた。また、文物鑑定委員は、甘肅省博物館や甘肅省文物考古研究所などの職員からも任命されており、公の機関の職員が一般向けに文物鑑定を行わない日本との大きな違いを感じた。



民俗芸能の公開



文物鑑定

写真中央：平成14年度交流員の趙雪野さん（甘肅省文物考古研究所歴史考古研究室主任）



文物鑑定

写真中央：平成13年度交流員の王琦さん（甘肅省博物館弁公室副主任）

写真右：賈建威さん（甘肅省博物館歴史部主任）

6. おわりに

これまで行われてきた秋田県と甘肅省との文化交流を継続・発展させた「新たな交流」を模索するという意味も持つ今年度の交流事業であったが、甘肅省博物館・甘肅省文物考古研究所をはじめとして、蘭州大学・北京大学の学生との交流や甘肅省内外の博物館・考古所の方達との交流を通し、秋田県と甘肅省との文化交流事業をより多くの中国の方に知ってもらうことが出来たことは、非常に意義深いものであったと言える。

また、甘肅省博物館・甘肅省文物考古研究所の皆さんから交流・研修面で大変お世話になったことはもちろんであるが、その他、中国で出会った多くの方達に、本当に親切に接していただいた。

さらに、甘肅省を中心としたものではあったが、中国の色々な土地を訪れ、その文化財や博物館に触れ、そこの人々と交流を通して、中国文化の懐の深さを感じずにはいられなかった。

この原稿は、今年度の交流・研修の報告のために書いたものであるが、この報告以外に、この交流事業を今後どのような形で秋田県、そして秋田県民のために報告し、さらには活かしていくかということが、これからの大きな課題である。

参考文献

『甘肅省博物館学術論文集』2006年、三秦出版社
来村多加史『万里の長城 攻防三千年史』2003年、講談社現代新書